

法堂（教えを説くためのお堂）

教えを説くためのお堂である法堂は高さが 20 メートルあり、建長寺で最も大きなお堂となっています。また、関東地域において最も大きな木造建築でもあります。

法堂はそもそも住職が説法を建長寺の多くの僧侶らに語るために使われていました。それは礼拝のためのお堂ではなく、部屋の奥にある高座も仏や仏像のために使われていたわけではありません。その代わりに、住職はその高座を使って集まった者たちに話しかけていたのです。

現在では法堂は説法にはもう使われておらず、高座は祭壇として役割を果たしています。しかし、法堂では公の式典や、コンサートやアートショーなどといった特別なイベントを催しています。法堂は一般に公開されています。

伝統的な墨を使った天井の龍の水彩画（墨絵）は、画家であり陶芸家でもある小泉淳作（1924-2012）によって 2003 年に完成されました。小泉は双龍図と呼ばれる建仁寺の天井に描かれた有名な円形の龍の画の作者でもあります。建長寺の水彩画は雲龍図という題で、寺の 750 周年を祝って製作依頼されたものです。その絵は神話に登場する雨をもたらず雲の龍、雲龍を描いています。説法による金言は雨のように降り注ぎ、下で聞く者たちを洗い流すと言われています。その龍の目は部屋のどこにいても追って来るかのようです。

天井の龍の下には、千手観音像が祭壇の後ろに座しています。その前には断食をする仏陀を模った詳細な彫刻があります。像はパキスタンにあるオリジナルのレプリカとして唯一公式に制作されたものです。像はパキスタン政府による贈り物であり、仏教芸術の貴重で大事な例でもあります。

法堂は 1814 年に再建されており、重要文化財に指定されています。